

湖との暮らしに大きな光…

霞ヶ浦の風物詩である帆引き船は、
それまでの漁法を根底から変えた画期的な船でした。

折

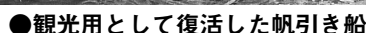
本



ORIMOTO
Ryohei

良 平

かすみがうらの人
1



きな帆をふくらませて、
悠々と湖面を走る帆引き

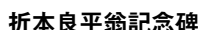
船。この船が初めて霞ヶ浦に浮かんだのは、明治13年のことでした。考案したのはかずみがうら市二ノ宮に生まれた折本良平、彼が46歳のときでした。

良平は、天保5年（1834）に、染め物問屋の息子として生

のころから釣りと発明が好きで、台所用具や農具の改良をしたり、近所の子どもの遊び道具をつくっては喜ばれていたそうです。当時の漁は大徳網漁が一般的で、網を所有する網元が20人ほどの曳子を雇い、2〜3隻の船を使って

漁を行っていました。しかし、彼が発明した帆引き網漁は、一人で広い湖を乗り回し、自由に魚をとれる画期的な漁法でした。彼は多くの漁師たちにその操業技術を伝えました。

その結果、霞ヶ浦の漁業は網元を中心とした組織的な操業から、家族を中心とした個人操業へと変化し、日雇いの賃金ではなく漁獲に見合った収入の道が開け、沿岸漁民の生活安定に



折本良平の業績をたたえる水産関係者によって屋敷前に建てられたものです。現在は、歩崎観音境内に移されています。

大きく貢献しました。

昭和40年ごろからトロール船が主流となり、帆引き船はまもなく姿を消しましたが、霞ヶ浦漁業の歴史を知る上で極めて重要な文化的遺産であることから、昭和46年に観光帆引き船として復活しました。雄大な霞ヶ浦に白い帆を上げて優雅に走る帆引き船を、随伴船から眺めることができます、多くの人を魅了しています。



- ①舟を風上へ漕ぎ出す。
- ②風上の適当なところで網を水中へ投げ入れる。その間、舟は流れる。
- ③網入れが終わるころ、帆柱をたてる。「はず縄」を張る。そして帆を上げる。これは最も機敏さを要する舟の上の作業。
- ④帆のたすきをかけ、進行の具合を見て「ものぐさ縄」をあやつる。その間漁師はトタテの上にいる。

風下の沿岸に近づく、この操作を逆に行い、「しど」の魚をトタテの中に入れて1回が終わる。これを「ひとがわ」という。風があれば「ふたがわ」「みがわ」と続ける。風が強いときには、「出し縄」をつめたり、帆足をつめたり、帆を下げたりという操作を行う。

Revolutionary new technology - Hobikisen Sailboats

In 1880, net-fishing using Hobikisen sailboats was contrived by ORIMOTO Ryohei, who lived in Ninomiya, Kasumigaura City, at the age of 46 as a means of fishing. Through his efforts, the fishery in Kasumigaura changed from organizational operations centering on the headman called amimoto to individual operations, which greatly contributed to the stabilization of the lives of inshore fishermen. Hobikisen sailboats disappeared for a time, but they returned in 1971 for tourism.